



## 「世界の風・日本の風 (気象ブックス020)」

吉野正敏 著

成山堂書店, 2008年5月  
140頁, 1800円 (本体価格)  
ISBN 978-4-425-55191-0

吉野正敏氏のライフワークである風研究に関する著作に新しい1冊が付け加わった。著者はこれまで長年にわたって風の研究を世界各地で行ってこられており、その成果は論文・教科書のみならず、多くの啓蒙的な著作、例えば「風の世界」や「風と人々」などに結実している。著者の興味は自然科学に留まらず、歴史・民俗学など多岐にわたり、その著作においても、その特色は十二分に発揮されている。今回刊行された本書も、非常に幅広い内容となっており、一読して色々と新しい知識を得ることが出来た。

著者は「はじめに」において、本書を執筆した動機を次の様に述べている。

「私は20年ほど前に『風の世界』という本を書いた。これは、学生時代から風の研究にかかわってきた一研究者を取り巻くさまざまな事象を述べたものであった。そこには自然現象もあれば、風情や風流を楽しむ人の姿もあれば、風水害に苦しむ社会の諸相もあるが、自分を中心に据えた視野で書いたものであった。今回の『世界の風・日本の風』は、なるべく広く世界の風と日本の風を記述し紹介するという方針でまとめたものである。」

また、「あとがき」において著者は次の様にも書いている。「大きな本屋さんへ行き、棚を見回すと、『風』の文字がつく本がいかに多いか驚く。小説・随筆・文芸の棚に一番多く、歴史・地理はもちろん建築・造園・園芸などの工学・農学の分野にもあり、衛生学や一般医学書にすら『風』の文字がつく本がある。気象学の棚、顔負けである。風とは空気の動きだから物理現象だが、現実には風が土台となって、たくさんのこれらの本の著者や読者に風が吹きわたる時には、すでに生理現象であり、心理現象となっている。言い換えれば、人間の心のあり方、精神状態を伝える使者になっているともいえよう。今回まとめた私の本がこういう現象・表現の奥底にかかわることができたならば、著者の望外のよろこびである。」

本書はインターネットのバイオウェザー連続エッセイに「風を歩く」として発表されたものをまとめたものである。インターネット版の「はじめに」においても著者は、「風の世界は、いつでも、どこに居ても興味につきない。(中略)それだけ魅力的なのが「風」なのだ。自然界の風ばかりでなく、人間関係・心の動き・気まぐれ、果ては文化一般などの表現として、風が最も適当で、そのため、「・・・の雨」とか、「雨の・・・」に比較して、風が圧倒的によく使われるのであろう。(後略)」と述べている。

これらの言葉に、著者の本書刊行の意図は述べ尽くされている。本書は、多くの事象に関係する風を、著者持ち前の幅広い知識と多くのフィールドワークの経験から、新たな切り口で分析している。

著者の他の多くの著作と同様に、本書の写真はほぼ全て著者によって撮影されたものであり、これまでの著作同様、著者の現場へのこだわりが現れている。この気象ブックスシリーズでは、啓蒙書では稀なことであるが、索引がついており、これも非常に役立つものとなっている。

本書の目次を示すと、

1. 序章
  - 1.1 風のスケール
  - 1.2 風と人間
2. 世界の風・日本の風, 百態
  - 2.1 季節風 (モンスーン)
  - 2.2 局地的な風
  - 2.3 風と人びと
3. 四季の風
  - 3.1 台風
  - 3.2 ハリケーン
  - 3.3 秋の風
  - 3.4 冬の風
  - 3.5 春の風
4. 風と民俗の接点
  - 4.1 風と地名
  - 4.2 風と住家
  - 4.3 屋根の造りと風

となっており、まさに風全般が取り扱われている。

評者は本書を読んで多くの新しい知識を得ることが出来た(多くの人々にとっては、既に自明のことであるかも知れないが)。

たとえば、

- ・空間のスケールとして「大空」(天翔ける大空)、

- 「中空」(童謡「鯉のぼり)」と並んで、人びとの頭上数メートルの空間を「うわの空」と呼ぶ。
- 東北地方に冷害をもたらす「やませ」は、奥羽山脈の風下側の田沢湖町では「宝風」と呼ばれ、民謡に歌われるとともに、物産品や橋の名前にもなっている。
  - 日中間での「風」という文字の使用法の相違点。例えば、「風格」は日中双方で同様の意味で使用されるが、「風度」という言葉は、「風格」とほぼ同じ意味であり、以前は日本語でも使用されたが、現在は中国語でのみ使用されている。
  - 鯉のぼりに関しては、魚が空を泳ぐという発想はヨーロッパの人々にとっては奇抜な発想と受け取られるが、日本人にとってはまったく違和感はない。これに関する、歴史的・気候的考察。
  - 最近流行の「田んぼアート(色々な稲を使用して田

んぼに絵を描くこと)」に関して、敦煌莫高窟の土の壁に描かれた仏像、日本の木彫の仏像、との文化史的な分析。

- 堀 辰雄の名作「風立ちぬ」に関する、風の動きに表現された作者の意図、舞台装置の描写に関する分析。
- 等々、興味深い話題が数多く語られている。

その他、ここでは個別には触れないが、風に関する多くの興味深い話題が語られている。くつろいで読めて、なおかつためになる本である。

現在、インターネットのバイオウエザー連続エッセイでは新たなシリーズ「異常気象」が連載されている。いずれこのシリーズも刊行されることを期待したい。

((財)日本気象協会 藤谷徳之助)